



相ノ木っ子だより

令和2年度
学校だより
6月号
上市町立相ノ木小学校

学校を再開して(前編) 一緒に学び、友に学ぶ

「校長先生、この川にいっぱい魚おるがんぜ」「ぼく、恐竜好きなんよ」

一緒に下校しながら、1年生の子がいろいろなお話をしてくれました。下校時、ランドセルの肩パッドがずり落ちそうになりながら「疲れた」と言っていた1年生たちも、遠い距離にも慣れてきて、だんだんと歩くスピードが速くなってきました。ちょっとした間に少したくましさが出てきたように思います。

5月末の段階的な登校日、そして6月からの学校再開。長かった臨時休業が終わり、ようやく学校に子供たちの元気な声が響くようになりました。5月上旬頃までの感染状況や不安な気持ち、閉塞感を考えると、学校再開は奇跡のようで、安堵や感謝の思いが自然と湧いてきます。みんなで自粛や我慢を続けてきた結束力の賜物だと痛感します。とは言え、これからも感染予防を怠らないよう注意、意識しながら日々を過ごすことが大事です。でも、日常が少し戻りつつある中で、気を張り詰め続けることはしんどいですし、「大丈夫だろう」と緩みがちになるのも分かります。生活や自分の意識において、「緊張と緩和」のバランスをどうとっていくべきか試されているような気がします。

感染予防のため、今後たくさんの学校行事等を中止せざるを得ません。また、グループやペア等の学習形態をとることがなかなかできませんし、体育や音楽等においては学習内容が限られます。まだまだ感染拡大以前の学校生活には戻りませし、不自由なことが多い新生活様式での再開となっています。それでも、子供たちは張り切って学習活動に取り組んでいます。子供たちの表情は、学校で友達と学ぼうれしさ、喜びに満ち溢れています。机の配置や給食の配膳等、友達と身体的な距離を取らなくてはならないのですが、心の距離は以前よりずっと近づいているような気がします。

そして、学級の友達と一緒に学ぶことが子供にとってどれだけ刺激になっているのかがよく分かります。冒頭の1年生のように、自分の思いを語れる場が必要ですし、それを聞いてあげる人の存在が子供たちの学びには大きいのではないのでしょうか。ましてや気心の知れた多くの友達がその役割を果たすと、子供の学習効果は絶大なものになるのだと思います。今回のコロナ禍による臨時休業と学校再開を体験し、目的意識、競争意識、学習意欲の向上等々、「共に学ぶ」ことのよさを子供たちは十分感じていることと思います。また、話し合ってよりよい考えを導き出していくこと、友達の考えを知り自分の考えを見直すこと、友達の意見から学び取ること等、「友に学ぶ」ことも重要な学校での学びです。コロナウイルス感染という不安、心配はつきまといますが、やはり学校での「共に学び、友に学ぶ」は子供たちにとってはなくてはならない、とても大切なことだと考えます。学校内でのソーシャル・ディスタンスをしっかりと保ちながら、心と心のつながりができる学習を工夫していきたいものです。

詩人の荒川洋治さんは、次のように言っています。

学ぶためには、学ぶ人とはぐれないことである。

子供たちが自分の学びをしっかりと続けていくためには、友達という存在に感謝し、大切にしていこうという気持ちが大事ですし、新生活様式をしっかりと守って自分も友達も元気に登校できる環境を築いていかなくてはなりませんね。後編に続きます。



学校を再開して(後編) ー子供たちに教えておくべきことー

学校再開後、授業している各教室を回って、それぞれの学年の工夫や子供たちの楽しそうな学習を見させてもらっています。ブロックを使いながら、真剣に数を合わせたり、引いたりしている姿。アゲハチョウの卵や幼虫、さなぎを見ながら、生命の神秘に感動している様子。国語辞典や漢字辞典を使って言葉や漢字を一心に調べようとする意欲。どの学年においても、子供たちの生き生きとした学習活動が見られます。こんな状況だからこそ、学びに飢えている子供たちの姿があり、友達との学習により一層充実感を味わうことができるのだと思います。久しぶりの授業に頭も体も少々疲れている感じも伺えますが、学習への欲求を満たしてあげ、よりたくさん、より深い学びとなるよう、子供たちにたくさんの刺激を与えていきたいものです。



作家であり、ジャーナリストでもある冷泉彰彦氏は、「教職研修」6月号において、コロナ禍に当たって教育に求められることとして、二つのことを書いています。一つは、率直に事実を直視し、科学的・社会的に正確な理解を導くことです。そのために次の4つの視点を子供に伝えたいと言っています。

- 1 人類が経済よりも個々人の生命を優先したという事実
- 2 大人の社会が命を守るために必死に戦っていること
- 3 その戦いに国際社会が一丸となって取り組んでいること
- 4 「死」に向き合うことで学ぶ生命の尊厳

これだけの大きな災厄に接し、子供たちは肌で感じていることも多いと思いますが、時代の証言者として人生を歩ませるという教育をこの機会にきちんと行う必要があると冷泉さんは語っています。人の命の大切さとそれを守るために必死に、そして一丸となって取り組む社会の重要性をしっかりと学ばせていきたいものです。さらに、二つ目として、危機の中で生きる力を子供たちに教える必要性を訴え、次の3つのことを挙げています。

- ① この戦いは善意だけでなく、数学と科学によって進められていること
- ② 多くの情報量のなかで適切に情報を受ける力
- ③ 危機におけるコミュニケーションの方法

具体的に言うと、「学問とは、立身出世の道具・優劣を選別するものではなく、人の命を救うため、人々を幸福にするためのもの」「危機の中で溢れる情報に振り回されて心身を害さないために大切なのは、事実と虚偽を見抜いて判別する力」「危機においては品格ある善意しか相手に届かないこと」といったことを子供たちに伝えていかなければならないのです。子供たちには、学びそのものの意義や価値、言葉やコミュニケーションの在り方等をこの機会にきちんと捉えさせたいと考えます。

寒さに震えた者ほど、太陽の暖かさがわかる。

これは、アメリカの詩人ホイットマンの言葉です。辛さや苦しみが大きければ大きいほど、それを乗り越えた時の喜びや満足感は大きくなります。また、そういった辛さや苦しみを体験した者でなければ、真のありがたさや感謝の気持ちをもつことができないのです。今回のコロナ禍、また今後も第2、第3の危機や苦難が訪れるかもしれませんが、子供たちの心が多くのことを吸収する機会にもなり得ます。通常の学習はもちろん、危機においてさらに学んでほしいこと、感じ取ってほしいことは何なのか、危機を乗り越えられる心の教育をしっかりと行いたいと思います。「子供たちには少し難しいことなのでは」と考えず、一人の人間、親、教師の立場から事実と思いを知らせ、彼らなりに考えてもらうことが、今後の人生の大きな宝物にきっとなるはずです。